

第2陣活動報告**西原一樹医師のレポートより**

3人とも、土曜日の夜9時過ぎに無事帰ってきました。1週間、留守を支えてくれたスタッフに感謝します。

私達の支援した期間は、震災後3週間が経過し、救命救急の医療から、維持期の医療への移行期でした。ライフラインはほぼ復旧し、避難所も統合されながら、避難所に入っている人数も震災直後の1/3程度に落ち着いてきていました。その状況の中で、私達の支援活動は3点ありました。

1点目は、避難所の健康を守り、環境を整備することでした。

2点目は、坂総合病院の救急医療体制を維持するための支援でした。

3点目は、被災地の組合員を中心に家庭訪問し、状況の把握と要求の掘り起こしをすることでした。

まず、避難所の活動は、民医連は4箇所の避難所を担当していました。内容は、診察と足浴の提供でした。診察は午前中15人前後、夕方から15人前後が受診する状況でした。風邪が中心ですが、津波が運んだ汚泥による粉塵が咳を長引かせているようです。長期的に呼吸器疾患の増加が心配でした。昼間は自宅の片付けに帰って夕方避難所に帰ってきて受診する人も多かったです。また、一時、胃腸炎が広がった避難所があり、スタッフでトイレ等を消毒して環境整備をしながら終息させることが出来ました。いい経験でした。

避難所も落ち着いてきたとはいえ、やはりプライバシーは制限されます。今残っている人たちは仮設住宅ができるまで長期間ここで暮らすことになります。仕切りを作る等の環境整備を要求したり、避難所が解散するまでは医療巡回を続ける必要があるでしょう。

2点目の、坂総合病院への医療支援についても、まだまだ継続が必要のようです。震災後、坂総合病院の救急車受け入れは毎日15台程度で、普段の2倍の要請が続いているようです。支援医師はERに配置されていました。また、入院への支援は難しいため坂総合病院のスタッフの過労を少しでも防ぐことが必要です。また、避難所診察など院外活動は、支援医師が行うしかないでしょう。

3点目の家庭訪問では、この震災の深刻さが浮き彫りになってきました。

津波が来なかったところは、倒壊等の被害が少なく復旧も早いのにに対して、津波が来たところは天地の違いがあります。昼は自宅の掃除をして夜は避難所に帰る人がたくさん居ます。避難所は合わないから無理して不便な自宅で暮らす人も居ます。今は震災処理で手一杯だけど、その先の雇用などに対しての不安を多くの人が訴えていました。

また、実際被災地を歩くと、津波の運んだ汚泥の臭さや埃の多さを肌で感じる機会になっています。

支援活動中の7日の深夜に、震度6の地震を体験しました。かなり強い揺れでした。地震後すぐに対策本部に病院スタッフと支援スタッフが集まり、対応する体制を作りました。トリアージブースもあつという間に作られ、その早さに感服しました。やはり日頃の訓練が大切ですね。幸い被災状況は軽くてすみました。たった2日間の停電も、避難所では再びトイレが使えなくなるなど大変でした。震災直後は本当に凄かったのですね。

また、1週間の支援活動でしたが、その間、全国から集まってきた民医連のスタッフとの交流も、貴重な経験でした。支援者数は医師15名前後・計120名前後でした。今回は広島からは計18名が参加。中四国から医師8名が参加しました。みんなが被災者に寄り添う思いで一致しているから、一緒に活動していてもすぐに仲間になれます。その一体感は、今後の仕事にも元気をもらいました。みんなで力を合わせることで素晴らしいですね。

震災後、落ち着きつつある中で、全国支援の必要性を再検討する時期ですが、まだまだ支援継続の必要性を実感して帰ってきました。そして、できたら一人でも多くのスタッフが支援活動を経験して欲しいと思います。

貴重な経験の機会を与えてくれたスタッフ・みなさんに改めて感謝します。

ありがとうございました！